

# 保育記録の内容分析にかかる研究の動向と展望

## Trends and Prospects of Research on Analysis of Childcare Records

小笠原 明子\*

Akiko OGASAWARA

### 要約：

本研究は、保育実践において作成される保育記録と、保育計画や子どもの理解・評価との関連性を検討することを大きな目的としている。その基盤として、保育記録の内容分析に関する先行研究を収集し内容を概観した。内容をもとにテーマ分類し、それぞれのテーマに含まれる内容を分析・考察した。その結果、内容は「障害児あるいは発達に気になる幼児」「保育の質」「保育者養成」「園内研究・研修」「保育記録の手法」「発達との関連性」「保育者との関係」の7つのテーマに分かれた。また、具体的には「子どもの実態把握」「保育者の援助・支援の方法」「保育の振り返り」「記録の取り方」などに言及していた。なお、保育記録の形式や内容は、園や保育者により多様性があり、それらの共有のためには体系化や客観的な記録の必要性が考えられた。保育記録と保育計画・子どもの評価との関連性は明らかにならなかったため、今後の検討課題とした。

キーワード：保育記録、保育の内容、保育計画

Childcare record, Contents of Childcare, Childcare plan

### I. はじめに

日常の保育実践で作成される保育記録は、保育の内容や子どもの実態を捉えるなどの役割をもっている。保育記録について保育所保育指針<sup>1)</sup>では、第1章総則の「保育の計画および評価」において「保育士等は、子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して保育の過程を記録するとともに、これを踏まえ、指導計画の内容の見直しを行い、改善を図ること」と明記している。また、(4)「保育内容等の評価」では「保育士等は、保育の計画や保育の記録を通して、自らの実践を振り返り、自己評価することを通して、その専門性の向上や保育実践の改善に努めなければならない」と明記し、その重要性を述べている。では、保育記録について、実際に各保育所ではどのような位置づけで作成し、どのような内容を記載しているのだろうか。本来、保育記録は保育カリキュラムの一部であり、保育計画や子どもの理解・評価の基盤となるものである。しかし、保育記録は保育カリキュラムと同様に、その形式は各保育所に任されている。そのため、記録の方法や記録の視点などは保育所ごとに違うことや、保育者の経験値や保育の捉え方によって様々であるといった問題を含んでいる。

著者は、保育実践において作成される保育記録が、保育計画の作成や子どもの理解・評価のための効果的な資料となるための検討を行っている。そこで本研究では、保育記録と保育計画や子どもの理解・評価との関連性を検討するための基盤として、これまでに行われた「保育記録の内容分析」に関する先

\* 長野県立大学健康発達学部こども学科・講師

The University of Nagano, Department of Child Development and Education, Lecturer

行研究の視点と内容を概観した上で今後の展望を得たいと考えた。

## II. 研究目的

本研究では、「保育記録の内容分析」に関する先行研究・文献を収集し、その視点や内容を分析・整理する。これをもとに、保育記録の「内容分析の視点」「保育計画・子どもの理解・評価との関連性」を検討した上で、今後の展望を得ることを目的とした。

## III. 研究方法

まず、CiNii Articlesにおいて「保育記録」をキーワードとして先行研究を検索、収集した（2019年1月現在）。収集した論文について、テーマや目的、分析の内容などから任意のキーワード（たとえば、保育記録に見られる「保育者のかかわり」など）を付し、そのキーワードごとに分類を行った。それぞれの分類について、その内容を分析し「保育記録」に関して記されている内容を考察した。

## IV. 結果

「保育記録」を検索語としてCiNii Articlesにより先行研究を検索した。その結果、107件が該当した。そのうち歴史的変遷に関するものを抜いた86件のうち、さらに保育記録の内容分析に該当する26件について内容ごとに分類を行った。

まず、内容ごとに各文献にキーワードを付し、それを分類した。その結果、「障害児あるいは発達の子になる幼児」「保育の質」「保育者養成」「園内研究・研修」「保育記録の手法」「発達との関係性」「保育者との関係」の7種類（テーマ）に分類することができた。

以下、それぞれのテーマの中で保育記録がどのように扱われていたかを示す（表1）。

### (1) 障害児あるいは発達の子になる幼児

「障害児あるいは発達の子になる幼児」に関連する論文において、保育記録がどのように扱われていたかを示す。たとえば、西垣、橋村、Dalrymple、小木曾、西垣（2016）<sup>2)</sup>の報告では、発達に弱さを感じる幼児を対象に、保育者がどのようにかかわり、配慮をするかといった保育者のあり方について検討した。ここでは、保育者が子どもの行動をどのように捉えているのかといったことを保育記録から解釈していた。また、七木田、林、松本、久原、日切、藤橋、正田、菅田、田中、落合、真鍋、金子（2011）<sup>3)</sup>の報告では、発達に課題がある幼児がどのように幼稚園へ適応していくのかといった過程を明らかにするために月に1回程度の保育記録などを用いてカンファレンスの資料としていた。

分類の特徴的なキーワードとして「子どもの実態把握」「援助・支援の方法」があげられた。

### (2) 保育の質

「保育の質」に関連する論文において、保育記録がどのように扱われていたかを示す。たとえば、林（2009）<sup>4)</sup>の報告では、保育者が作成した保育記録とスタッフミーティングの記録をもとに、保育の質の構成に必要とされる保育者と子どもの関係性について分析した。ここでは、毎日の保育の中で何を大切にしたい記録をしていたのかを図解化し、記録した時点では気づいていない意味を見出していた。また、林（2011）<sup>5)</sup>の報告では、保育の質において重要な位置づけとされる保育の過程の質が、保育者にとってどのように経験されているのかを明らかにするために、保育記録の質的分析を行っていた。ここでは、

表1 保育記録をあつかった研究

分類	キーワード	筆者	発行年	内容
障害児あるいは発達に気になる幼児	子どもの実態把握、援助・支援の方法	西垣、橋村、Dalrymple、小木曾、西垣	2016	言葉の育ちに弱さを抱えた幼児の実態と、それに対する保育者の願いや援助が書かれた保育記録を分析し、幼児と保育者との関係性の構築過程や保育者が意識した援助内容などを整理・提示した。
		七木田、林、松本、久原、日切、藤橋、正田、菅田、田中、落合、真鍋、金子	2011	発達に課題がある幼児の保育記録を分析した。「園生活と家庭生活」、「好き・嫌いに関する事柄」、「保育者の役割」から検討を行い、よりよい支援のあり方を提示した。
保育の質	保育の振り返り、記録の分析	林	2009	保育者が「保育者と子どもの関係の質」をとどのように捉えられているかを検討した。その結果「保育の方向性を確かめながら子どもとの関係を新たにする」プロセスを、保育者が「保育者と子どもの関係の質」と捉えることを明らかにした。
		林	2011	保育の質の基盤となる保育過程において保育者が経験する内容を、保育記録のKJ法分析により検討した。その結果、8グループに分類でき、その特徴から保育者は、子ども・保育者・職員・保護者との関係性を重視していることを明らかにした。
保育者養成	記録の取り方、実践の振り返り、子ども理解	吉田	2016	子どもを観る目や保育センスは保育記録の理論的考察を基に育まれるとし、そのための保育記録の方法と活用についてKJ法とワールドカフェを用いた検討を行った。その結果、保育者としての具体的な行動内容や思考、保育の方向性が整理されてくる効果が見られた。
		児玉	2015	保育者養成校の学生にエピソード記録の書き方を指導した結果、保育の捉え直しがなされたり保育を言語化する楽しさを感じるようになった。
		小山	2006	エピソード記録で書かれた実習日誌を分析した結果、客観的な事実よりも担当保育者のその時の思いを記録する方が、実習生の子どもへの理解が深まることが分かった。
		小山	2007	実習日誌にエピソード記録を導入した結果、エピソード記録型実習日誌は、幼児理解と保育者の援助理解につながったという結果が得られた。
園内研修・研究	振り返り、保育者のかかわり	橋川	2016	園内研修を通して、①保育者の関わりと子どもの活動の一連の流れとその過程における成果を記録することの必要性、②保育者間の学び合いが子どもの理解の共有と保育の質を保証し、保育者の成長を生み出す契機となることの認識、が園内で深まった。
		渡辺	2014	集団保育における保育者の「葛藤」を中心に課題解決に効果的な園内研究のあり方を検討した。その結果、集団保育の制度的制約を踏まえた規範理論を前提にすること、全体状況が捉えられる環境図を活用すること、指導計画や保育実践の映像を読み解き、保育者同士の「対話」を促すことの重要性が示された。
保育記録の手法	記録の取り方、保育者のかかわり、子どもの実態	長谷部、加藤、坂東	2014	デジタル化による保育記録システムの提案、設計、開発を行った。このシステムを使用することにより「幼児理解が容易になる」「児童の情報を活用しやすい」「教員自身の指導の振り返りができる」などの効果が得られた。
		橋川	2014	ラーニング・ストーリーを用いて、子どもが生み出す学びの具体的な場面とそれを見守る保育者の姿勢を検討した。その結果、ラーニング・ストーリーは、子どもがものとかかわり、環境を切りひらくまでの過程を具体化する手立てであるとともに、保育者の共感的見守りにより子どもの挑戦が持続することを指摘した。
		河邊	2008	幼児の遊びの様子を保育環境図に書き込む、保育マップ型記録を作成した。その結果、空間全体を俯瞰する意識をもつことで、子どもの遊び理解の厚みが異なるものになること、また、この意識化のために保育マップ型記録が有効であることを指摘した。
発達との関係性	保育者の役割、発達との比較	横山、鎌田、松本	2015	4歳児の1年間の姿を記録し、教育課程を再編成する観点を検討した。その結果、保育内容との関連を考えながら、「個」「個と個」「集団」といった3つの観点から子どもの育ちを捉えていくことが保育の質の向上に繋がることを指摘した。
		松永、大岩、岸本、山田	2013	子どもの規範意識の芽生えと、子ども集団の規範意識の生成過程における保育者の役割についてビデオ記録や保育記録から検討した。その結果、子どもたちがお互いを肯定的に受け止めあう「居場所」が生成する過程が見出された。また、「居場所」生成の条件として保育者が子どもを肯定的に捉える態度が必要と考えられた。
		太田、土田	1994	幼児の発達評価について保育現場での行動観察評価と発達検査(JMAP)を用いて、その関連性を検討した。その結果、日常の保育場面ではとらえにくい発達の問題をJMAPが拾い出す可能性や、保育記録から子どもの主体性や健康上の問題などを評価できることを指摘した。
保育者との関係	保育者のかかわり、子どもの行動分析、保育者と子どもの関係性	佐々木、大方	2017	乳児の保育記録から泣く行為の記述を取り出し、クラス集団における月別の内容分析を行った。その結果、乳児の泣く行為には月毎の内容に特徴があることを指摘した。
		林	2012	保育者と子どもの関係性の時間的経過における変容を、保育記録の質的分析から検討した。その結果、関係性は子ども・クラス・保育者の相互作用により変容することを指摘した。

保育記録の質的分析から記録に書かれた内容の意味について検討し記録内容を分類していた。

分類の特徴的なキーワードとして「保育の振り返り」「記録の分析」があげられた。

### (3) 保育者養成

「保育者養成」に関する論文において、保育記録がどのように扱われていたかを示す。たとえば、吉田 (2016)<sup>6)</sup>の報告では、学生と保育者を対象に、保育センス（ここでは、日々の子どもの姿から予測をし、適切な環境を用意しタイミングよく援助をすることと述べている）を理論化するための保育記録の方法や活用を、KJ法とワールドカフェを実践し分析していた。また、児玉 (2015)<sup>7)</sup>の報告では、実習の際、「実践記録に何を書いてよいか分からない」「書き方が分からない」といった悩みを抱える学生がいることから、エピソード記録の書き方を指導し、学生の変化を分析していた。さらに、小山 (2006)<sup>8)</sup>、小山 (2007)<sup>9)</sup>は学生が幼児理解と保育者のかかわり方の理解等を深めるためには、どのような保育記録の作成方法が良いかという視点から内容や方法を分析していた。ここでは、保育者の作成したエピソード記録の分析とエピソード記録で記入された実習日誌の効用と課題の検討から解釈を行っていた。

分類の特徴的なキーワードとして「記録の取り方」「実践の振り返り」「子ども理解」があげられた。

### (4) 園内研修・研究

「園内研修・研究」に関する論文において、保育記録がどのように扱われていたかを示す。たとえば、橋川 (2016)<sup>10)</sup>の報告では、子どもが取り組む活動とそれへの保育者のかかわりを保育記録から省察し、それらをもとにした園内研修の取り組みを分析していた。また、渡辺 (2014)<sup>11)</sup>は、保育者が抱える保育の中の葛藤に焦点を当て、葛藤が従来の保育記録にどのように影響するかを検討していた。さらに、葛藤を変容し、課題を解決するための園内研究の内容を検討していた。

分類の特徴的なキーワードとして「振り返り」「保育者のかかわり」があげられた。

### (5) 保育記録の手法

「保育記録の手法」に関する論文において、保育記録がどのように扱われていたかを示す。たとえば、長谷部、加藤、坂東 (2014)<sup>12)</sup>は、保育記録の記録方法とその活用方法の課題を解決するため、容易な記録と、その記録をいろいろな視点から閲覧できるシステムの設計と試作を行った。また、橋川 (2014)<sup>13)</sup>は、子どもを継続的に観察・記録するラーニング・ストーリーを活用しながら実際の子どもの様子と、その具体的場面を見守る保育者の姿勢を明らかにした。さらに、河邊 (2008)<sup>14)</sup>は、保育記録の取り方が効果的に保育の構想に役立つ方法を考え、幼児の遊びの様子を保育環境図に書き込む保育マップ型記録を用いて記録を作成した。そして、保育マップ型記録は、子どもの姿から次の保育の構想に繋げることができる記録法であることを明らかにした。

分類の特徴的なキーワードとして「記録の取り方」「保育者のかかわり」「子どもの実態」があげられた。

### (6) 発達との関係性

「発達との関係性」に関する論文において、保育記録がどのように扱われていたかを示す。たとえば、横山、鎌田、松本 (2015)<sup>15)</sup>は、観察や保育記録、対話を通して捉えた子どもの姿を、保育所保育指針に明記されている子どもの姿と比較検討していた。また、松永、大岩、岸本、山田 (2013)<sup>16)</sup>は、規範意識の芽生えや子ども集団の規範意識の生成過程について、保育者の役割に注目した。保育者の保育実践を1年間観察し、ビデオ記録と保育記録から非言語的応答関係について分析をしていた。さらに、太

田、土田 (1994)<sup>17)</sup>の報告では、健全な保育園児を対象に発達検査（日本版ミラー乳幼児発達スクリーニング検査）を実施し、そのスコアと保育記録を数値化したものを比較・検討していた。分類の特徴的なキーワードとして「保育者の役割」「発達との比較」があげられた。

### (7) 保育者との関係

「保育者との関係」に関する論文において、保育記録がどのように扱われていたかを示す。たとえば、佐々木、大方 (2017)<sup>18)</sup>は、子どもの「泣く」という行為に注目し、保育記録から泣く行為の記述があったものを取り出し、クラス集団における月別の内容との関連性について分析をしていた。また、「泣く」という行動と保育者との関係性についても分析・考察していた。また、林 (2012)<sup>19)</sup>は人間関係に着目し、時間的経過における関係の変容を1年間の保育記録を時系列に沿って分析していた。保育者と子どもの人間関係は個人と個人、個人と集団それぞれとの関係が常に作用しあって構築され、発展している複雑なものであることの一端が明らかになった。

分類の特徴的なキーワードとして「保育者のかかわり」「子どもの行動分析」「保育者と子どもの関係性」があげられた。

## V. 考察

### (1) 障害児あるいは発達の子になる幼児

障害のある幼児あるいは発達の子になる幼児にとって、保育記録をもとに子どもの行動プロセスを理解することが重要な役割を果たすことが明らかになった。保育記録は、ただ子どもの状況を記録するだけでなく、保育計画を作成・実践する上での基礎的資料となる。一方で、保育記録の作成のために、保育者は子どもの行動の意味や、行動パターン、子どもの発達状況を読み解く力を備えていることが必要である。さらに、記録を読み解くだけでなく、その後の子どもの発達を見越して保育の計画を作成したり、配慮を行うことが重要となってくると考える。

障害のある幼児や発達の子になる幼児については、日々の記録だけでなく発達検査を利用し、客観的な視点からの子どもを理解することも重要である。これに関して小笠原・前田 (2009)<sup>20)</sup>小笠原・立元・前田 (2015)<sup>21)</sup>は、子どもの保育記録と発達検査を組み合わせ、子どもの発達状況や実態の姿を理解して保育を組み立てることで、子どもの行動が拡大していくことを明らかにしている。障害のある幼児や発達の子になる子の保育記録は、その記録をもとに個別の指導計画が作成されることが多いが、そこに発達検査という客観的データがあることで、保育計画を確かなものにしていくことが可能になる。さらに、障害のある幼児や発達の子になる幼児がよりよく過ごすことや、育ちや発達を促すためには、保護者の理解と協力が必要となってくる。しかし、障害のある幼児や発達の子になる幼児をもつ保護者は、受容と否定を繰り返しながら子どもの障害を理解していく。そのため、保育者は、保護者の様子に合わせて子どもの状態を伝えていくこととなるが、その際に何を伝えるかは苦慮する点である。この時、主観的な保育記録だけでなく、客観的データの発達検査を用いることで、保護者の子どもの状態理解に分かりやすさが増すと考えられる。さらに、これから見られるであろう発達の予測もある程度可能となることから、保護者とともに援助の方針と方法を検討することが可能となり、結果として保護者の受容と理解をより円滑にすることができるのではないかと考える。

### (2) 保育の質

保育者はこれまでの経験をもとに子どもとかかわりをもっている。そのかかわり方が適切であったのか、子どもにどのような影響を与えているのかを考え、自身の保育を振り返るために保育記録の活用は

有効である。しかし、保育者が自身の保育を振り返り、より良い保育を実践するという意識をもっていなければ意味をもたない。保育者が得てきた経験は、暗黙知として蓄積される。そこでは、子どもの状態や状況の把握に合わせて、どのようにかわりをもつか、どのような配慮や援助が必要かを瞬時に判断し行動することが含まれてくる。保育者の行動にはすべて意味があり、それは子どもにとって最善でなければならない。そのためには、保育者が日々の経験から得られる暗黙知を保育記録の中に記載し形式知とすることで、以後の的確な子どもの実態把握と保育の振り返りに有効な資料になるのではないかと考える。一方で、保育者が行動を起こす意味は保育者間で全て一致するものではない。その理由は、保育者一人ひとりの感覚とこれまでの経験が異なるからである。保育記録をもとに情報の共有や話し合いを行うことで、それぞれの経験値が昇華され、保育者個人内や保育者間での保育の質の向上につながるのではないかと考えられた。

保育の質を考える時に、保育は誰のためのものなのかという意識を明確にもっている必要がある。たとえば、子どもが大人にとって困ったと思われる行動をとったときに、その困った行動は誰にとっての行動なのかを考えなければならない。子どもは感覚的に行動をすることが多いが、そこに思考的な考え方もつ大人（保育者）がかかわりをもつために、時として大人の意識で子どもを観て大人側に引き込んでしまうことがある。子どもの行動と行動の理由をきちんと捉え、記録として整理することで、客観的な思考をもとに的確な子どもの把握とかかわりを導きだすことが可能になる。このことが保育の質の向上に繋がるのではないかと考える。

### (3) 保育者養成

保育の記録を最初に作成するのは、保育者養成校で履修する保育実習での実習の記録である。実習の記録では、実習で何を学ぶか、学びたいかといった目標が記載され、学生はこの目標に従って「活動内容」「子どもの様子」「保育者の動き」「実習生の動き」「環境整備」などの項目を時系列に沿って整理し記録していく。また、実習を何回か経験することで観察の視点が定まってくると、学生は時系列よりも客観的に物事を捉え、子どもに起きた出来事に対しての自分の考えやその出来事の背景を探って記録できるようになってくる。このように、実習の記録は、「保育とはどのようなものか」「保育者は子どもとどのようにかかわっているのか」「背景にはどのようなことが起こっていたのか」を学生の視点で整理したものと言える。しかし、この実習の記録は学生にとって作成に苦慮するものであり、この段階で最初に躓いてしまうと、書くといった行為に対して抵抗を示すようになってしまう現実がある。養成校において記録をとるということの意義や意味づけをしっかりと行うことは、学生の不安を減らし、実習と向き合うために重要な意味をもつと考えられる。

学生は、様々な分野から保育について学び、子どもの理解や保育者の役割等を学んでいく。その中で自分なりの保育者像を作り上げていく。そして、保育者になるために保育現場での学びを通じて子どもへのかかわり方について理解をし、適切な援助の方法を身につけていくことが重要なことだと分かった。しかし、その反面、保育実習での学びと学生のもつ保育者像とが必ずしも一致するとは限らない。むしろ保育実習を経験することで、保育や保育者に疑問をもつ学生もいる。保育者の養成は、養成校だけで担うのではなく、保育の現場との連携の中でしっかり行っていくことが必要である。特に、子どもへのかかわり方については、実際の保育現場で子どもとのかかわりを通じて学ぶことや、子どもと触れ合う中で理解し身につくことも多い。保育者は、その時々で学生が感じたことや、実際に子どもとかわる中で学びについて、随時、指導できる環境を整えておく必要がある。具体的には、保育者が保育記録から保育の振り返りや評価・見直しをすることに加えて、自分自身の経験による暗黙知を形式知として、学生に伝えられるように準備をしておくということである。

#### (4) 園内研修・研究

園内研修については、保育所保育指針<sup>22)</sup>第5章「職員の資質向上」に「保育所は、質の高い保育を展開するため、絶えず、一人一人の職員についての資質向上及び職員全体の専門性の向上を計らなければならない」と明記されている。このように、園内研修には重要な役割があることがわかる。本研究の結果から、保育記録は実践の振り返りとして捉えられ、検討事項や保育の課題を明確にする素材となっていることが分かった。したがって、今後は保育記録の分析などから保育の課題を抽出し、園内研究のあり方などについて検討することも可能であると考えられた。また、保育記録を通して子どもの実態を把握し園全体で共有することで、子どもの観察の視点を振り返り、深めることが可能となることが分かった。このことから、保育者の子どもへのかかわり方の変容を保育者間で共有することの重要性が示唆された。さらに、保育記録を保育者間で共有し、そこから見えてくる子どもの状況や保育者のかかわりの実態などについて協議、検討することは、保育を様々な視点から捉えることになり、保育所保育指針<sup>1)</sup>第1章3で明記されている専門性の向上や保育の質の向上に繋がる。そして、保育所全体としての保育内容の改善や保育の計画の見直しを可能とする。しかし、そのような作業を論理的に解決するのであれば、保育記録からの視点だけではなく、客観的評価の視点を含めることも有効だと考える。なぜなら、統一された視点から評価することで問題点の共通理解を可能とし、改善の効率性が向上すると考えるからである。ここで気をつけなければならないのは、保育の改善が子どものためではなく、研修や研究を実施することとすり替えられてしまうことである。何のために遂行するのか、保育者自身が目的を明確に持っていないと間違えやすくなってしまう。研修や研究の目的を遂行するために保育を実践するのではないこと、そのために子どもの理解や実態を把握するわけではないということをしかりと捉えておく必要があると考えられた。

#### (5) 保育記録の手法

保育記録は保育実践上、重要な役割をもっている一方で、その形式は各保育所により異なっている現状がある。その理由は、保育記録は各保育所の保育方針や保育目標、あるいは保育計画に基づき作成されるため、園ごとの個性が出るからである。これに加えて、保育者が何に重点を置き記録するかによって書き方や内容が異なってくるし、基本的なところでは保育者養成校でどのような形式を学んだかということにも影響を受ける。したがって、このように多様な形の保育記録をもって、保育全般の視点から保育計画や実践について話題にすることは容易なことではない。

このことについては、保育記録の内容や記入システム（手法）を一定の視点で体系化することで、記録の取り方に統一した方向を示すことが可能になると考えられる。もちろん、保育者は、記録をとる意義をきちんと理解した上で作成することで意味があるものになるため、その意識をもって作成することができるようにする必要もある。

保育記録は保育カリキュラムの見直しに重要な役割をもっている。なぜなら、保育カリキュラムは保育記録による子どもの評価のもとに作成されるからである。子どもの実態の把握や保育の振り返りに有効であるため、本来は第三者がその記録を見ても子どもの様子が思い浮かぶように丁寧に作成されなければならない。しかし、通常の業務に追われ、保育記録を作成することに時間を費やすことが難しい現状があることも否めない。勤務の時間内に保育記録の作成が確保されるよう、保育記録の作成システムや内容、体制等の見直しも必要であると考えられる。

#### (6) 発達との関連性

保育の中で子どもの発達を十分に理解することは保育を実践する中で重要な役割をもっている。子どもがこれまで積み上げてきた発達と現在の発達、さらに今後出現するであろう発達を理解して保育を実

践していくことは、子どもの発達をきちんと積み上げていくことを可能とする。そのためにも、現在の発達状況を的確に把握することは必須である。今回の先行研究の中で保育所保育指針に明記されている子どもの姿との比較検討をすることで子どもの姿を現実的に捉えることが可能であることが分かった。しかし、それは発達状況の比較であって、その子どもの個の発達状況をすべてきちんと理解できたかということには疑問が残る。なぜなら、子どもたちは同じ行動をとっているように見えても一人一人の行動の意味は異なっていると考えられるからである。つまり、比較をするのではなく、保育を実践する中で発達の尺度を用いて一人一人の発達状況を理解することが、子どもの発達を促す契機になるのではないかと考える。保育者の願いとして育ってほしい姿を思い浮かべるのではなく、客観的に子どもを観察して発達を捉えていくことが必要であると考え。

## (7) 保育者との関係

保育者が子どもに対してどのようなかかわりを持ち、それがどのように影響を与えているのか保育記録から分析することで、保育者が子どもの行動をどのように導いているのかが分かった。ただし、子どもの行動は、保育者からの導きだけでなく、自らの自発的な経験と思考によって拡大していることは言うまでもない。その経験は保育者の模倣をきっかけに起こることが多い。保育者は子どもとのかかわり方だけでなく、子どもから模倣される存在であることを意識し、日々の行動をとることが重要であると考える。

また、子どもにとって保育者が特定な情緒的絆（愛着）の対象となっていることが重要である。言い換えれば、保育者と子どもの間に信頼関係が築けているかということである。これは、保育者側からの視点ではなく子ども側を感じなければいけないことである。保育者との関係を主とし、他者とのかかわりにも着目し保育記録を作成することで子ども同士のやり取りなどといった集団での様子も見えてくるのではないかと考えられる。

保育者にとって、個へのかかわりと集団へのかかわりにおける配慮が明確になることは、子どもの社会性の構築においてとても重要な役割を果たすと考えられる。なぜなら、保育所は、子どもたちが経験する初めての集団であり、自分以外の他者の存在を意識しなければならない場だからである。そのため、保育者は、その集団の中で個の存在も認めながらかかわりをもたなければならない。以上のようなことから、子どもの発達の側面からも保育記録を作成する必要性があると考え。

## VI. 総合考察

保育記録には、保育所保育指針に明記されている保育の過程の記録や、保育の振り返りだけでなく、子どもとのかかわり方などといった保育者自身に関する実態も記載していることが分かった。また、子どもの行動分析や子どもの実態の把握などといった子どもに関する理解を主とした記録があることも分かった。このような保育記録をもとに保育計画の実施評価を行うことで、一貫した保育計画の見直し（再考）と実践、すなわち連続性のある保育が可能になるのではないかと考える。一方、保育所保育指針では、保育を実践する上で子どもの発達を理解することの重要性をうたっている。しかし、本研究で行った分析の結果、保育者が保育記録を通して子どもの発達をどのように捉えているかを論じた報告は見られなかった。著者は、保育者が子どもの発達をどのように捉え、理解しているのかを、保育記録の記述から明らかにできることが望ましいと考えており、今後の検討課題となるところであった。

## Ⅶ. まとめ

保育記録を振り返ることで、保育内容や子どもの行動、保育者と子どもの関係性など様々な面を読み解くことが可能である。その反面、保育記録の書式が様々なため、保育所それぞれの個性のみならず、子どもの実態を読み解く保育者の力量等により、差が出てしまうことが懸念された。そして、保育記録の中には保育者の主観（個人的な考えや思い）が強く出てしまう傾向があることも分かった。つまり、保育記録を子どもの発達の評価の指針とするためには、保育記録の内容や体系の整理が必要であると考える。保育所保育指針の中では、「子どもの発達について理解し一人一人の発達過程に応じて保育をすること」と発達の視点が明記されているが、評価については保育士等の自己評価、保育所の自己評価に留まっている。発達過程を理解するにはその子どもが、現在、どの発達段階にいるのかを明確にして保育を実践しなければならないが、子どもの発達の視点からの評価については明記されていない。保育記録からの保育内容の振り返りと子どもの実態把握に加え、子どもの発達の視点から読み解くことを並行して実践することでより子どもの理解を深めることが可能となり、計画の見直しを的確に実施することが可能となると考える。

保育記録は、保育カリキュラムの基盤になるものである。保育カリキュラムは、たとえば、年間の保育計画から期別（学期）の保育計画へ、期別（学期）の保育計画から月毎の保育計画へ、月毎の保育計画から週毎の保育計画へ、週毎の保育計画から日毎の保育計画へと連携させながら詳細に計画が立てられていく。さらに、これらは、行事ごとにも同じように詳細な計画が立てられている。ここに記された子どもの実態と保育者のかかわりの実態に合わせて、再度保育計画を見直すという流れにもなる。しかし、前述のように、保育記録には形や内容の上でばらつきがあることや、保育者の主観が入ってしまうことが懸念されるため、今後の課題として保育記録の書式等を再考するとともに、保育計画との関連を明らかにする必要がある。また、保育記録の内容についても検討し、子どもの様々な側面を観察・記録し、個々の発達をきちんと理解するための方法（資料）になるよう考えていくことが必要であると考え

## 文 献

- (1) 厚生労働省（2017）保育所保育指針平成 29 年告知. フレーベル館. 9
- (2) 西垣吉之・橋村晴美・Dalrymple 規子・小木曾友則・西垣直子（2016）言葉の発達を促す指導・援助に関する実践研究－言葉の発達に弱さを抱える A 男の保育記録の解釈を通して－. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究 第 1 巻. 99-109
- (3) 七木田敦・林よし恵・松本信吾・久原有貴・日切慶子・藤橋智子・正田るり子・菅田直江・田中恵子・落合さゆり・真鍋健・金子嘉秀（2011）発達に課題のある幼児の幼稚園適応に関する実践的研究－適応過程とその関連要因の検討を中心に－. 広島大学 学部・付属学校共同研究機構研究紀要 第 39 号. 45-50
- (4) 林悠子（2009）実践における「保育者－子ども関係の質」をとらえる保育者の視点－保育記録の省察から－. 保育学研究. 第 47 巻第 1 号. 42-54
- (5) 林悠子（2011）保育実践における「過程の質」－保育記録の分析から－. 佛教大学社会福祉学部論集 第 7 号. 77-94
- (6) 吉田恵美子（2016）保育センスを理論化する保育記録の方法と活用. 長崎短期大学研究紀要 第 28 号. 19-29
- (7) 児玉理紗（2015）保育者養成課程におけるエピソード記述の実践 保育実践の言語化の意味を考える. 比治山大学・比治山大学短期大学学部教職課程研究 1. 113-119
- (8) 小山祥子（2006）幼児理解と保育者の援助理解を深める保育記録に関する研究（Ⅰ）－保育記録の原理・方法から再考する－. 北陸学院短期大学紀要 第 38 号. 99-113

- (9) 小山祥子 (2007) 幼児理解と保育者の援助理解を深める保育記録に関する研究 (Ⅱ) - エピソード記録型実習日誌の効用と課題 - . 北陸学院短期大学紀要 第39号. 45-58
- (10) 橋川喜美代 (2016) 保育記録による園内研修と保育への振り返り - 選抜研修がもたらす保育者の変容と園内への学びの広がり - . 兵庫教育大学研究紀要 第49巻. 9-18
- (11) 渡辺桜 (2014) 集団保育において保育課題解決に有効な園内研究のあり方 - 従来の保育記録と保育者の「葛藤」概念の検討をとおして - . 日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第39巻. 37-47
- (12) 長谷部朱音・加藤直樹・坂東宏和 (2014) 幼稚園における保育記録活用を支援するシステムの開発. 情報処理学会研究報告. 3.1-8
- (13) 橋川喜美代 (2014) 保育記録から見た学びの生成と保育者の共感的見守り - テ・ファリキとラーニング・ストーリーを通して - . 兵庫教育大学研究紀要 第45巻. 19-29
- (14) 河邊貴子 (2008) 明日の保育の構想につながる記録のあり方 - 「保育マップ型記録」の有用性 - . 保育学研究. 第46巻第2号. 245-256
- (15) 横山真貴子・鎌田大雅・松本知子 (2015) 保育における4歳児の育ち - 1年間の保育記録を保育の質の向上につなぐ試み - . 次世代教員養成センター研究紀要 (1). 45-56
- (16) 松永愛子・大岩みちの・岸本美紀・山田悠莉 (2013) 3歳児の子ども集団の「規範意識の芽生え」における保育者の役割 - 非言語的応答関係による「居場所」生成 - . 保育学研究 第51巻第2号. 223-234
- (17) 太田篤志・土田玲子 (1994) 保育記録による子供の評価と発達スクリーニングテストの関連について. 長崎大学医療技術短期大学部紀要 7. 77-84
- (18) 佐々木清恵・大方美香 (2017) 乳児保育における保育者との関係性 (Ⅲ) - 保育記録を基にした乳児の「泣く行為」の月別内容分析 - . 大阪総合保育大学紀要 第12号. 197-212
- (19) 林悠子 (2012) 保育記録に見る保育者と子どもの関係性 - 子ども1人1人とクラス集団に注目して - . 佛教大学社会福祉学部論集 第8号. 17-37
- (20) 小笠原明子・前田泰弘 (2009) 野外保育による幼児の「育ち」の支援. 保育学研究 第47巻第2号. 121-131
- (21) 小笠原明子・立元真・前田泰弘 (2015) 野外における発達の気になる幼児の行動拡大への保育士のかかわりの効果. 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学 第32号. 91-90
- (22) 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針平成29年告知. フレーベル館. 38-39